

里海づくり活動の状況（平成 26 年度）

里海とは、人の手で陸域と沿岸海域が一体的に総合管理されることによって、物質循環機能が適切に保たれ、豊かで多様な生態系と自然環境を保全することで、私たちに多くの恵みを与えてくれる場です。この貴重な財産を次代へと継承するため、より多くの人が環となって「望ましい沿岸海域の環境」を維持していかなければなりません。このため環境省は、平成 20 年度～22 年度にかけて里海創生支援の事業を進め、全国の里海づくり活動の実施状況調査を行い、活動の場と活動の主体の観点から類型区分を行いました。

平成 26 年度は 1 回目の調査から約 5 年を経て、実績も重なってきた里海づくり活動の状況を再び全国規模で把握し、内容を整理しました。

1. 調査方法

調査方法は、1 回目の調査と同じく、アンケート調査としました。

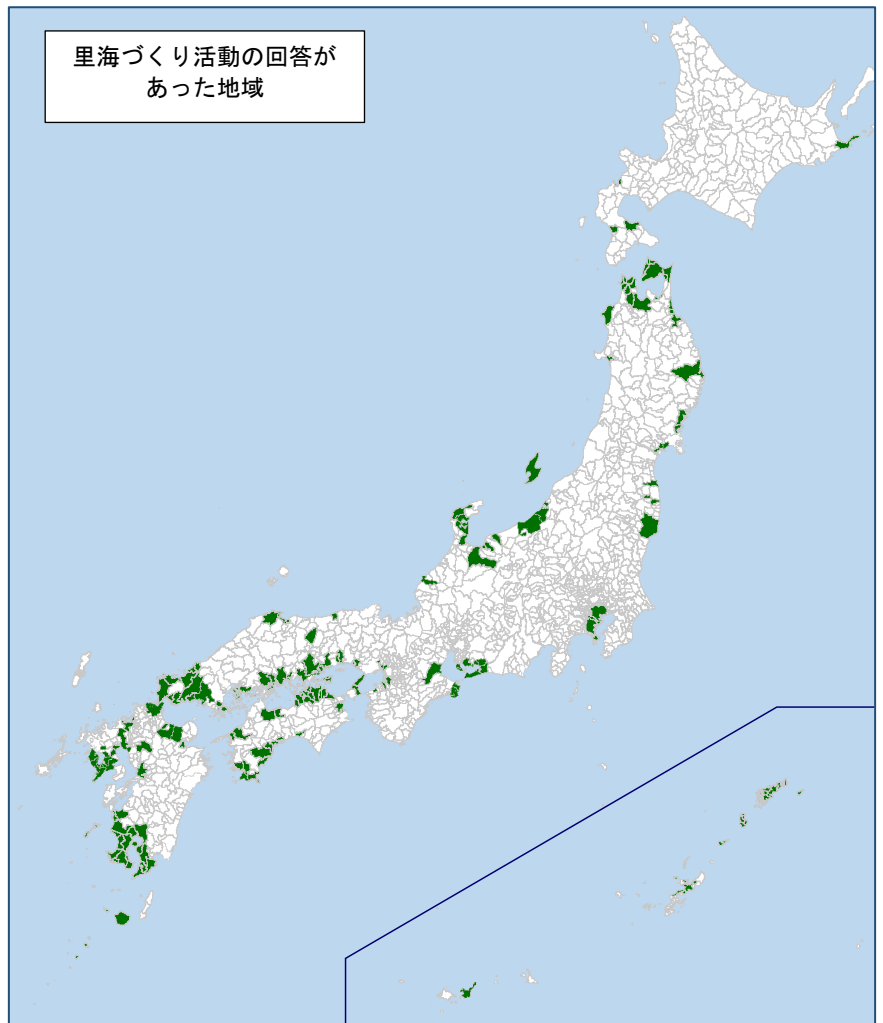
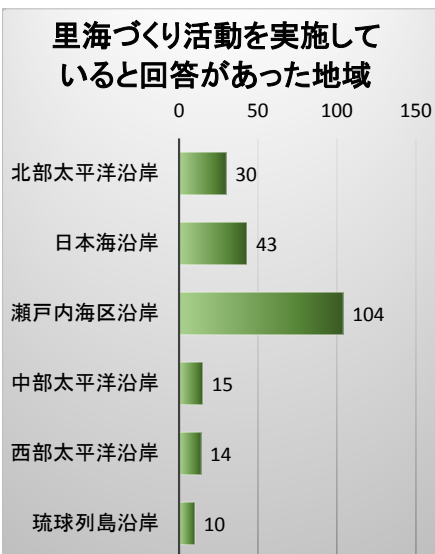
アンケートの対象は、地方自治体（都道府県や市町村）、NPO 団体、漁業関係者などとしました。

送付数 245 に対し、約 40%の回答を得ました。

2. 活動の広がり

アンケート調査で確認された全国の里海づくり活動数は 216 にのぼりました(平成 22 年調査時は 122 例でした)。

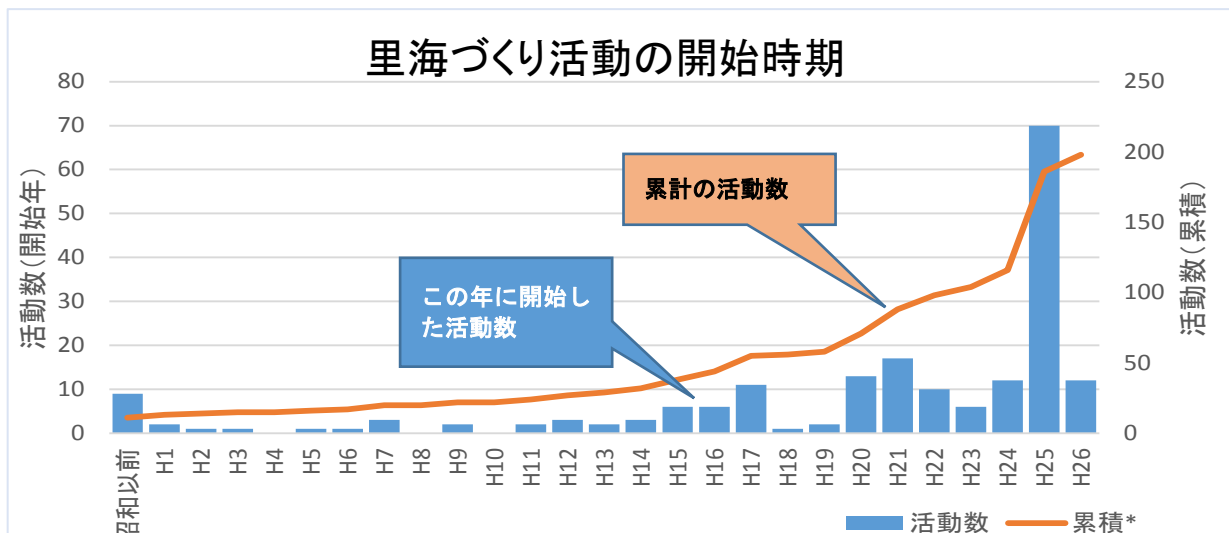
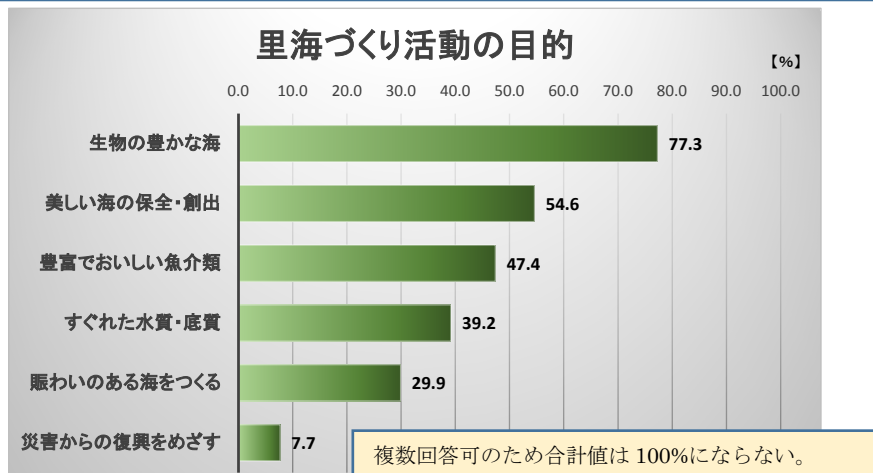
里海づくり活動は北海道から沖縄までの全国各地で行われており、特に瀬戸内海沿岸に多いことがわかりました。



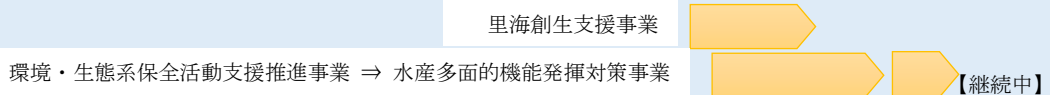
海域区分は、「モニタリングサイト 1000 沿岸域調査(磯・干潟・アマモ場・藻場)マニュアル 第 6 版」(2014 環境省)に準拠

3. 活動のきっかけと活動の開始

・里海づくり活動は近年に活動を開始した例が多いが、20年以上の継続期間を経ている活動もある。国や官公庁の事業実施期間後も活動を継続している例も多いと考えられる。



里海づくり活動に関係の深い事業（一部）



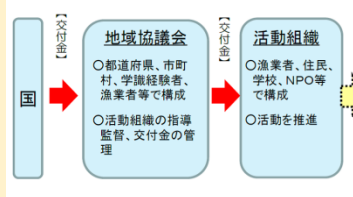
回答数：196

*累積数は、現在も行われている活動数

水産多面的機能発揮対策事業

漁業者の高齢化、漁村人口の減少等により、水産業・漁村の多面的機能の発揮に支障が生じており、多面的機能の効率的・効率的な発揮に資する地域の取組を支援することが必要。水産業の再生・漁村の活性化を図ることを目的に、漁業者等が行う水産業・漁村の多面的機能の発揮に資する活動に対し、一定の費用を国が支援。

【事業の仕組】



【主な活動項目】

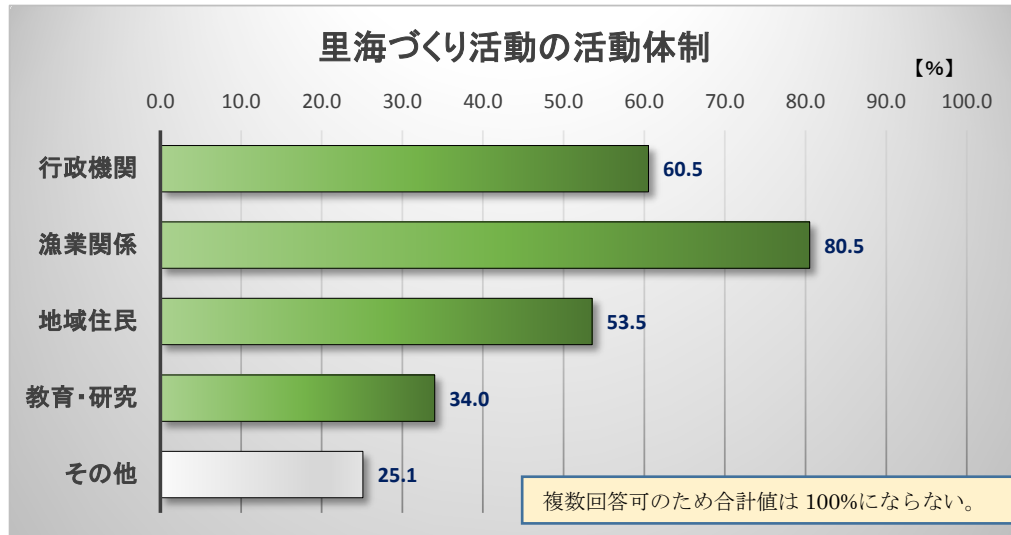


・事業実施期間：平成25年～平成27年度

水産庁資料より抜粋

4. 活動の体制

- ・里海づくり活動の実施体制は、海と密接な生活を送っている漁業関係者やその組織のみでなく、官（地方自治体等）や民（住民団体等）の多様性が特徴となっている。教育・研究機関と協働している例が多く、啓発や教育に着目している活動も一定割合見られる。



事例：地方自治体による包括的な活動

現在、県では香川県、市町村では三重県志摩市、石川県七尾市が「里海」の名を冠する組織を配置し、漁業者、住民を包括したビジョンのもと里海づくり活動を実施している。（香川県「環境森林部 環境管理課 水環境・里海グループ」、三重県志摩市「農林水産部 里海推進室」、石川県七尾市「産業部 里山里海振興課」）。

また、福井県では県の研究所として、福井県里山里海湖研究所を設立している。



広報しま別冊

志摩市 里海読本



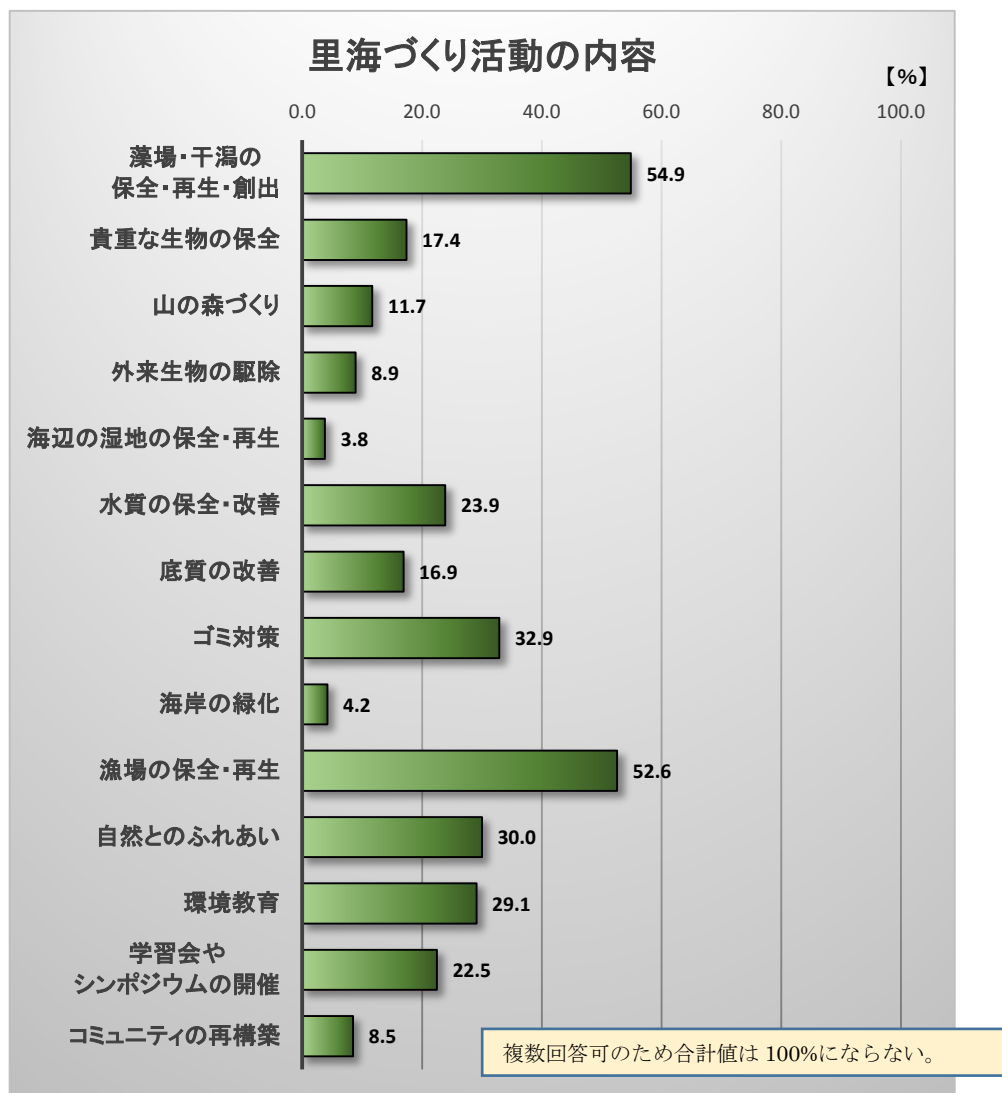
人と自然とのつながりに感謝がある。
人と人とのつながりに笑顔がある。
今と昔のつながりに未来がある。
この一瞬を次の世代に伝えたい。



七尾市 世界農業遺産七尾市行動指針

5. 活動の内容

- ・里海づくり内容は、藻場づくり等、環境への直接的なアプローチに加え、啓発・環境教育を目的とした活動内容が多くみられた。

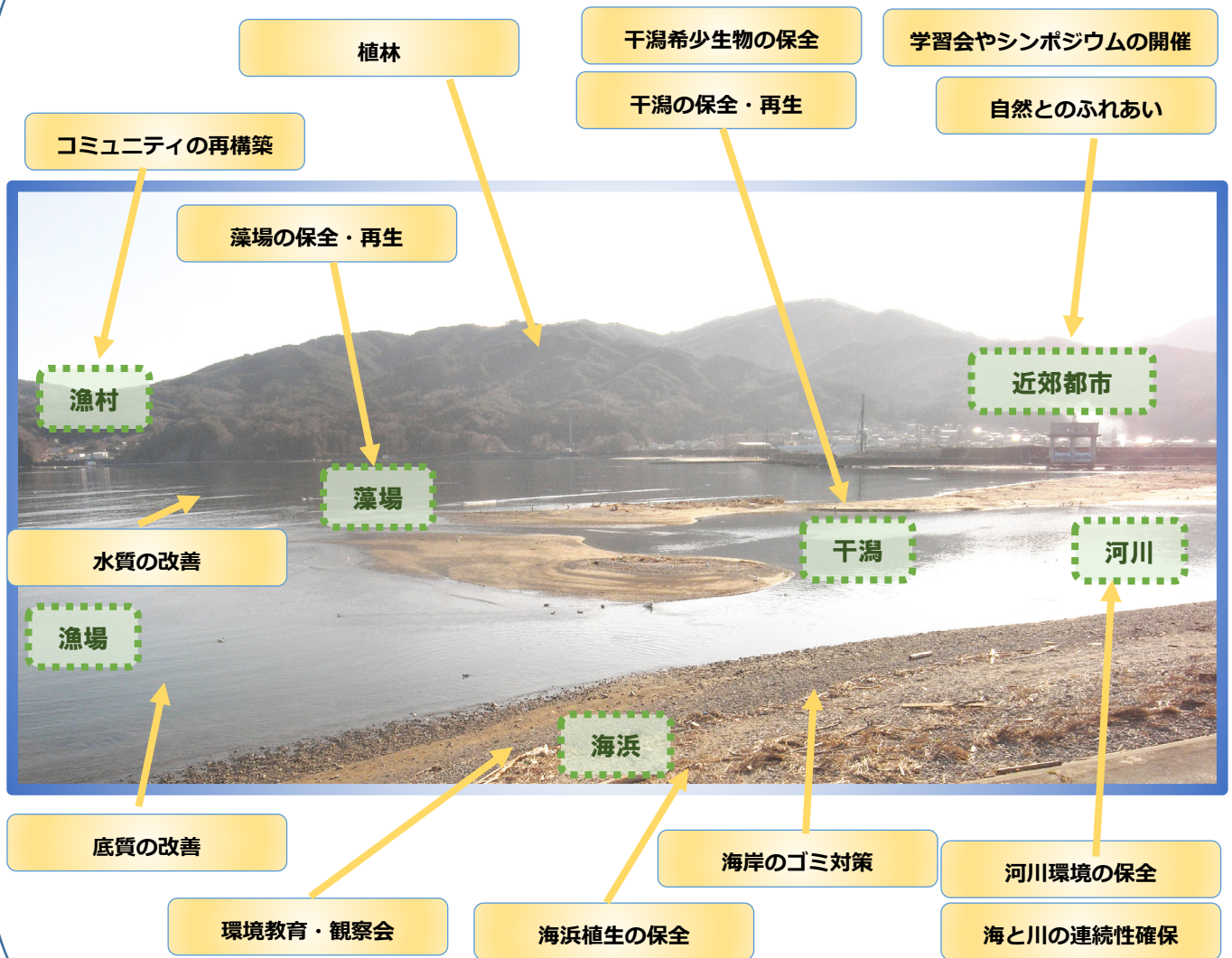


事例：なぜ環境教育に力をいれるのか

環境教育の意義について、ヒアリングでは「海の自然が再生・回復していくには長い時間がかかる。それに比べて、環境に高い関心を持つ人を育成することは短時間で可能である。結果的に、自然環境の回復のためには『人づくり』が最も近道である。」との意見もあった。

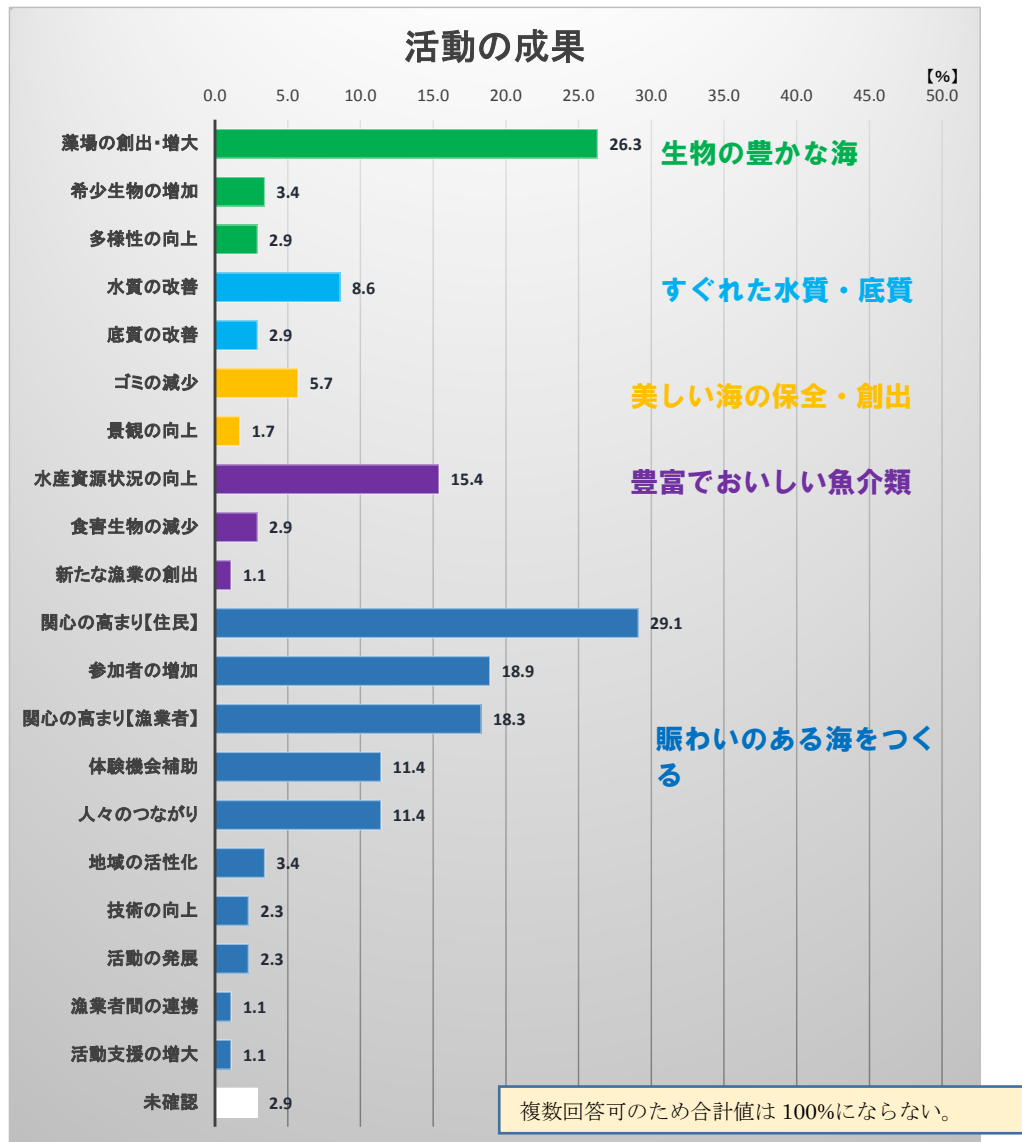
・里海づくり活動が、海域の様々な場に対し多様なアプローチを行っている。活動体制の多様性が、活動内容の多様性につながり、結果的に包括的な里海づくり活動につながっていることが予想される。

活動内容のイメージ



6. 活動の成果

- ・里海づくり活動の主体が実感する「成果」は、「藻場の造成・拡大」や「水産資源の増加」等の環境改善に直結した成果もあげられているが、「関心の高まり」「人々のつながり」等、人と人とのつながりを大きな成果としてあげられている。



事例：神事の復活という成果

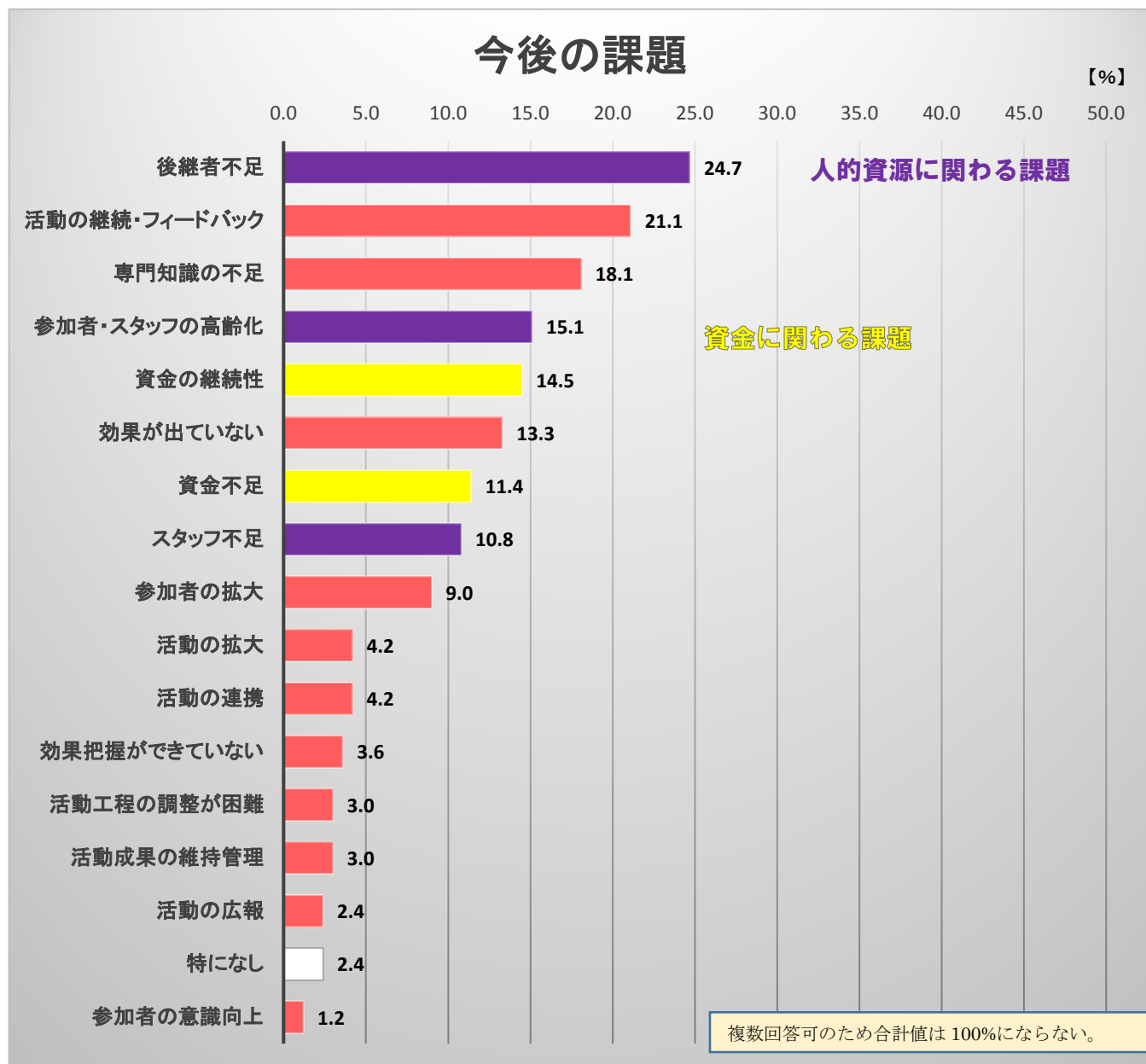
古来、海辺の集落の神事・祭事は環境と密接に結びついてきたが、環境の変化に伴い途絶えている場合もある。横浜周辺で活動によりアマモ場の復活に伴い、神事（瀬戸神社「無垢塩祓ひ」）が復活した事例がある。これは、「環境保全・修復」が「地域コミュニティの復活」に直結した事例である。



木村・工藤（2011）神奈川県・瀬戸神社の「無垢塩祓ひ」神事とアマモ。より引用

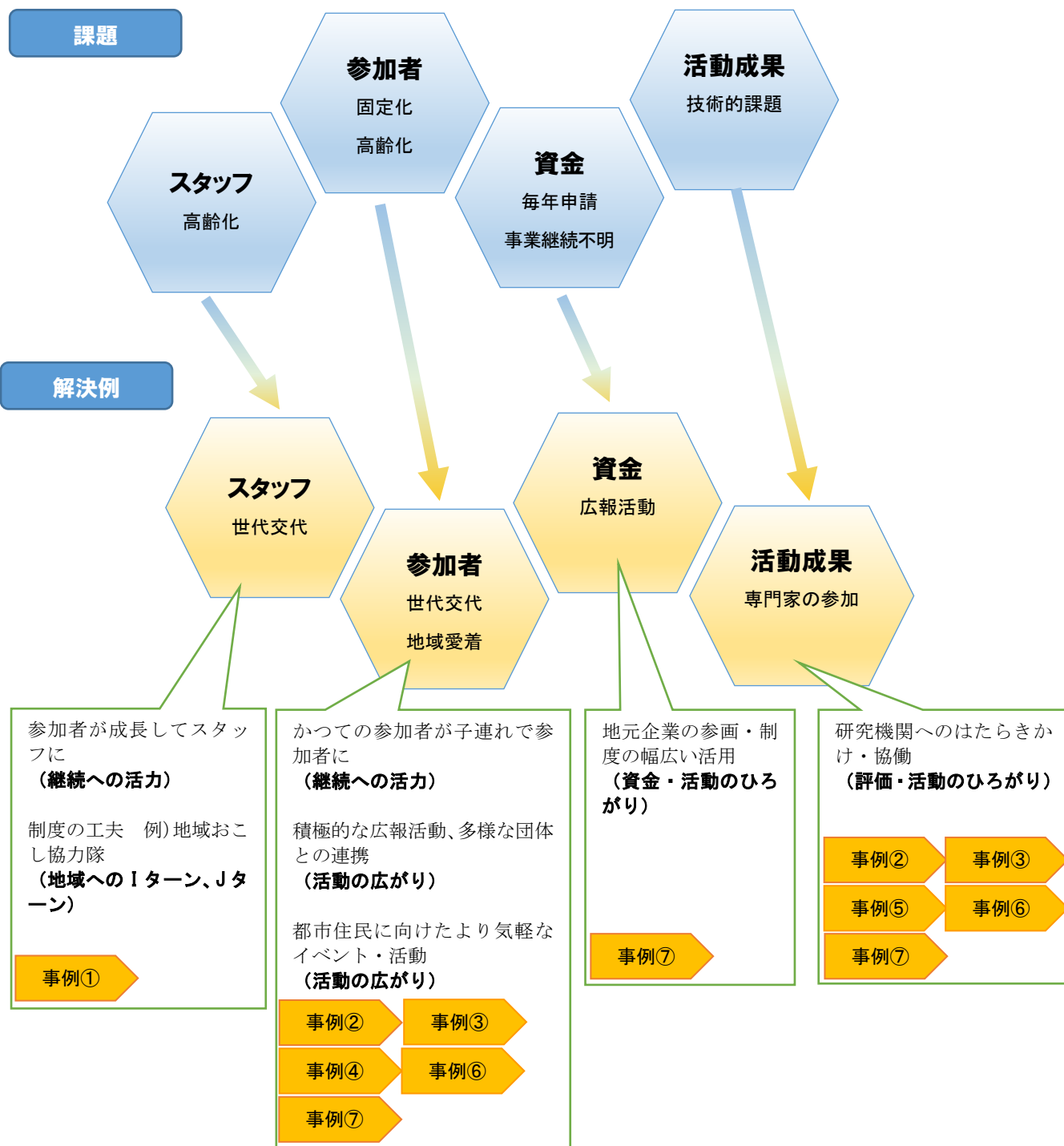
7. 今後の課題

- ・里海づくり活動の主体が懸念する課題は、「スタッフや参加者の高齢化・後継者」「活動資金・資金の継続性」等、人にかかわる課題、資金等継続性に関する課題が多くあげられている。



8. 課題と解決策

- ・アンケートやヒアリングの結果から、活動をにやう参加者やスタッフなど人と組織にかかわることや資金確保などの難しさに対して、成果を発信していく努力および工夫や目的とする成果をあげる技術の確保を行うことが重要であることが分かりました。
- ・次項以降に、里海づくり活動を展開している方々、あるいはこれから里海づくり活動を始めようと考えている方々にとって参考になると思われる事例を紹介します。



事例①

〈生きもの元気子どもも元気漁師さんも元気な中津干潟を100年後も〉NPO 法人水辺に遊ぶ会ほか 大分県中津市

様々な体験を通して干潟への関心を高める体験型の活動であり、活動の継続性、人づくり、活動範囲、組織の輪を広げていった事例。

〈目標〉 (キーワード:干潟の重要性の認識)

周防灘の豊前海に面する中津干潟は縄文の昔から人々が食料を得る場であった。そんな干潟から人々の足が徐々に遠くなくな、港湾整備事業をきっかけに自然豊かな中津干潟を見直す活動が1999年から始まった。

私たちの祖先が大切につきあってきた身近な海や水辺の自然をきちんと見つめ直し、自分たちのくらす中津の海や水辺の未来を考えるため、私たち海辺にくらすものは、もっともっと海のことを知る必要がある。遠ざかってしまった「海と人の心の距離」を取り戻し、中津の海や水辺と人々のくらしをつなぎ直すために、NPO 法人水辺に遊ぶ会を中心に活動が続けられている。

〈実施〉 (キーワード:多様な活動)

中津干潟を活動の場に、多様なアプローチを行っている。

- ・ずぼっとはまって干潟あそびは楽しー活動のメインの干潟観察会
- ・べりりな世の中の中のひずみを海岸に見るー海岸漂着ゴミ対策としての年4回実施する海岸清掃と漂着物調査
- ・にんきものはカブトガニー環境学習・啓発活動。アオギスやカブトガニ等の希少種の恒久的な保全を目指す。
- ・あやしい干潟調査隊が行くー調査研究活動
- ・そんけいするのは漁師さんー干潟漁業との連携
- ・ぶんかや歴史は大切な海の記憶ー海と浜の郷土史の調査
- ・かそう(仮想)博物館「水辺に遊ぶ会MUSEUM」ー情報発信

〈効果と課題〉 (キーワード:人のつながり、活動の拡大)

- ・活動の成果は、活動のビーチクリーン参加者が1500人を超えるようになった(年間)。市中、近隣小学校の多くが干潟学習に取り組むようになった。理解、協力してくれる漁業者がいる。
- ・一方、若手スタッフ、後継者が不在・育てるための資金がない、いつもお金の心配が尽きない(100%ボランティア)といった課題も抱えているが、活動が15年におよび、かつての参加者がスタッフとして活躍している。
- ・また、重要港湾である中津港の整備に対して行政、あるいは漁業者への中津干潟の重要性を訴え続けている。



1999年度

★活動を始めた頃、
小さかったこの子たちも
こんなに大きくなり
なりましたー!



干潟調査を
お手伝い中。

出典：水辺に遊ぶ会 HP

事例②

〈森は海の恋人〉NPO 法人森は海の恋人ほか 宮城県気仙沼市

地域に密着した流域一体の活動であり、災害復興、人づくり、活動範囲を広げていった事例。

〈目標〉（キーワード：自然の雄大な循環・繋がり）

三陸リアス式海岸の中央に位置する気仙沼湾は波の穏やかな天然の良湾である。江戸時代からノリ、大正時代からはカキ、近年はワカメ、ホタテ等の養殖が盛んであった。

しかし、昭和 40～50 年代にかけて環境が悪化し、赤潮が発生、カキの身は赤くなり商品とならない事態となった。

カキの成長には川から運ばれる森の養分が不可欠であることに注目、川の流域に暮らす人々と、価値観を共有しなければ、きれいな海は帰ってこないことを認識、川から海へとつながる雄大な循環に着目した活動がスタートした。

〈実施〉（キーワード：環境教育、森づくり、自然環境保全、震災復興）

平成元年、気仙沼湾に注ぐ大川上流の室根山に植樹を行う「牡蠣の森を募う会」が作られ、「森は海の恋人」という標題も生まれた。植樹祭の参加に加え、環境学習、京都大学による森里海連携学の創設と活動の輪が広がるなか、環境教育を軸に、森づくり、自然環境保全の3分野の事業を展開する NPO 法人として、再出発した。

東日本大震災後で活動地域は大きな被害を受けたが、「人づくり」の活動を継続するとともに、出現（復活）した干潟の保全、舞根森里海研究所の設立、震災後の環境モニタリングの継続等新たな課題への取り組みを継続している。

〈効果〉（キーワード：人のつながり、活動の拡大）

- ・調査をすすめ、保全活動をおこなってきた干潟にはアサリが大量に生息し、ウナギの生息も確認された。淡水から海水のエコトーンがあり、希少生物も生息している。
- ・震災後、まず稚魚が、やがて成魚がみられるようになり、生態系の強さを実感するとともに、「何もしない」保全もありうると考えている。
- ・京都大学をはじめ、かかわりのある大学は 15。
- ・視察は最近半年（2014 年後半）で 1500 人に達した。
- ・同じ津波や災害を受けたインドネシアやフィリピン等海外からも視察。
- ・イベントにはかつて参加していた方々が、自らの子どもを引き連れて参加も。海の変化を確認するには長い年月を要するが、海を改善しようとする「人づくり」はもっと短い期間で達成できる。



森づくり
植樹祭



環境教育
舞根森里海研究所



環境保全
環境調査



まちづくり
情報提供

事例③

〈南三陸町震災後の自然環境活用事業〉 NPO 法人環境生態工学研究所ほか 宮城県南三陸町

東日本大震災後の地域コミュニティの復興に里海づくり活動を取り入れた活動であり、地元の住民に加え、多様な団体と連携。

〈目標〉 (キーワード:震災復興、持続利用可能)

漁業の盛んな宮城県南三陸町は、平成 23 年 3 月の東日本大震災の被害を被った。被害は、特に津波の壊滅的な影響が陸上の集落・インフラのみならず、沿岸生態系にも及んでいた。

この未曾有の災害からの復興の一環として、持続可能な水産・漁業の復興を目的として、里海づくり活動がスタートした。

〈実施〉 (キーワード:地域主導、環境モニタリング)

活動にあたり、現状把握のための科学的な調査が実施され、河口部や汀線付近の干潟や藻場の減少で自然浄化能力が低下していること、アマモ場は大きな被害を受けていたが、アカモク等のガラモ場は藻場を形成していたこと、生態系の完全な復活には時間を要すると予想されること等が判明した。



調査で確認された志津川湾内のアカモク（左）とアマモ（右）

このため、持続可能な利用をめざして、「環境と生産活動の調和」、「地場産品の開発」、「里山と里海をつなぐ人・物・心の交流」、「漁協・農協・青年部・婦人部の協働」、「6次産業化(地産地消)」等の活動を実施している。なかでも、豊富に自生し、生態系の基点となっている未利用の資源であるアカモクに着目し、食品・商品の開発を行っている。

活動は、南三陸町生活改善研究会、地区ごとの生活改善グループ活動の共同体、大学有識者、県や町の支援等と協働・連携し、そのほとんどが里山・里海にすむ人々(被災した方も多い)、多様な職種の集まりであることが特徴である。

〈効果と課題〉 (キーワード:人のつながり、物質循環)

- ・アカモクの播種から刈り取り、有効利用により円滑な物質循環に寄与している。
- ・アカモクの商品開発を通して地域コミュニティ間(特に被災して仮設住宅に暮らす方々)や里人と海人のつながりが強まっている。
- ・被災地の里海づくり活動の一環として、復興工事の環境への影響の把握が課題だと考えている。



アカモクの播種



アカモクの刈り取り



アカモクの商品開発

事例④

〈御前浜を「まもり、つかい、そだて」地域の宝
”里浜”として、よりよい形で未来へ継承〉
NPO 法人「チーム御前浜・香櫨園浜 里浜づくり」ほか
兵庫県西宮市

都市部において様々な体験を通して砂浜への関心を高める体験型の活動であり、活動の継続性、人と人とのつながり、活動範囲を広げていった事例。

〈目標〉 (キーワード:活動を通じた人のつながり)

「御前浜・香櫨園浜」は、夙川の河口に広がる大阪湾の奥域に残された貴重な自然海岸である。この浜には、多様な植物や動物が生息しており、多くの渡り鳥が飛来する。また、国指定史跡「西宮砲台」が現存している。

都市部にありながら豊かな自然と歴史資源が保たれている貴重な浜を、地域の宝「里浜」として大切にし、誰もが自由に安心して楽しめる浜をめざして、大人と子どもと一緒に楽しみながら、よりよい浜を未来に引き継いでいくことが目的である。

浜を「まもり」「つかい」「そだてる」活動を通して、人と人、人と海の新たなつながりをめざして NPO 法人「チーム御前浜・香櫨園浜 里浜づくり」を中心に活動が続けられている。

〈実施〉 (キーワード:多様な活動、継続的な活動)

御前浜・香櫨園浜を中心に多様な活動を継続的に実施している。

- ・浜辺クリーンアップ&自然観察、防災学習(津波から避難する親子でのかけっこ訓練や、阪神淡路大震災、東日本大震災の体験や復興支援活動について写真等により説明)の実施(毎月1回)
- ・「自然たんけん!」を開催(専門家の協力をえた「海辺の生き物さがし」「渡り鳥の観察」等)
- ・外来種駆除のためのイベントを開催
- ・「親子で楽しむ」海辺であそぼ!里浜健康体操“を開催(毎月1回)
- ・近隣の小学校2校の3年生を対象に「環境出前講座」を実施(每学期)
- ・「海辺のひろっぱフェスタ」を開催(毎年9月)
- ・西宮砲台を生かして、砲台ジャズや砲台ギャラリー等を実施
- ・情報誌「ツタエハウダイ」の発行により、浜の情報や、チームの活動を紹介(メンバーの手作り)

〈効果と課題〉 (キーワード:人のつながり、活動の拡大)

- ・活動の成果は、ビーチクリーニングやイベントが恒例となり参加者が増えている(ビーチクリーン参加者年間1,000名、フェスタ参加者1,500名)。近隣児童が、浜に親しみを持ち浜を大切にするようになった。文化庁から「西宮砲台を含む御前浜」が重要名勝地に選定された。活動が行政からも高く評価され、西宮砲台保存活用委員にも任命された、等。
- ・一方、スタッフの高齢化や後継者の不足、活動費用の捻出が厳しい、助成団体も継続助成を認めていないといった課題も抱えている。



環境出前講座



ビーチクリーニング



海辺のひろっぱフェスタ



砲台ジャズ

事例⑤

〈アマモ場造成〉日生町漁業協同組合ほか 岡山県日生町

漁業者の問題意識から生まれた漁村型の活動であり、学校を含めた地域全体の活動、具体的な成果の獲得に至った事例。

〈目標〉 (キーワード:アマモ場、生育場、漁獲、造成)

日生では、アマモ場の縁に沿って移動する魚介類を小型定置網により漁獲する漁が営まれている。以前は広域に分布していたアマモ場が大きく衰退(590ha(1940年代)→12ha(1985年))し、同時に漁獲量が減少した。漁業者は、これまで操船の障害、網の汚れの原因と邪魔者扱いしていたアマモ場が魚介類の住処となっていたことに気付き、その重要性を認識した。そこで当初は少しでもアマモ場を回復し、漁獲量の増加を目標として、アマモ場造成がスタートした。

〈実施〉 (キーワード:研究機関の指導、アマモの播種、地盤の嵩上げ、消波、カキ殻散布)

日生町漁業協同組合の組合員らが中心となり、岡山県の水産課や水産試験場の指導、協力のもと、以下の活動を実施している。

- ・過去の分布情報を参考にアマモの種を播種。
- ・透明度の低下に対して、海底地盤の嵩上げとともに、増加する波力の緩和のため消波施設を設置。
- ・カキ殻のアマモの着床・活着を促進する効果を見出し、カキ殻散布を実施。

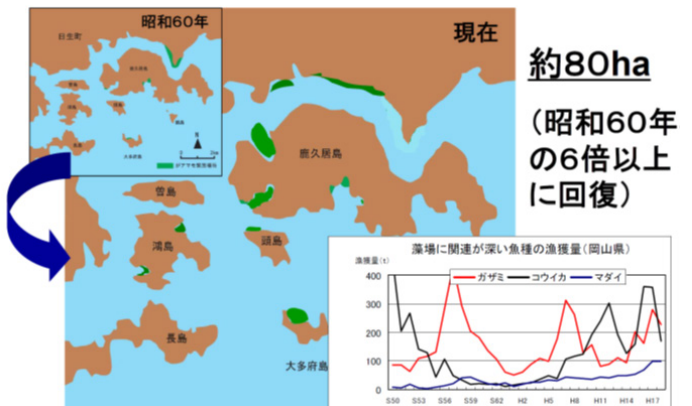


アマモの繁茂

出典：環境省(里海(さとうみ)とは?)

〈効果〉 (キーワード:藻場の拡大、多様性の向上、漁獲増、活動の拡大、ふれあいの促進)

- ・アマモ場の分布範囲の拡大。
- ・クマエビの漁獲が増加、絶滅したと思われていたモエビも漁獲。
- ・豊凶のあったカキ養殖の生産量は、2008年頃から安定して生産。
- ・2011年からはNPO 共存の森ネットワークやコープ岡山、2013年には地元中学生も加わり、播種等の再生・保全活動を共に実施。
- ・ミニシンポジウムの開催、有識者等によるアマモ場の役割等の講演、地域を支える漁業者や地域住民らと意見交換により、里海の重要性を全国に発信(2012年)。
- ・日生には、直販施設を備えた「五味の市」がある。年間50万人の観光客が訪れる。



出典：環境・生態系保全活動支援制度検討会資料(2008)

〈実施体制〉

日生町における活動は漁業協同組合を中心に、以下のような活動組織の連携に及んでいる。

市民・NPO	里海づくり研究会議、(財)おかやま環境ネットワーク、共存の森ネットワーク、地元中学校 ほか
漁業関係者	日生町漁業協同組合
行政	岡山県農林水産部水産課、岡山県農林水産総合センター水産研究所、備前市
企業	生活協同組合コープおかやま ほか
大学・教育機関	京都大学、九州大学、岡山大学、広島大学ほか

事例⑥

〈全国アマモサミット〉
全国アマモサミット実行委員会

地域の主体的な自然保全・再生活動を後押しし、全国の地域間が連携を構築して、活動が広がっている事例。

〈目標〉 (キーワード:市民の主体的な活動、海辺の自然再生活動)

海辺の自然再生・保全には、地元へ根付いた人々の主体的な活動が必要である。その活動の継続には、市民の方々が、海辺の現状を理解し、分かりやすい目標を設定し、成果を実感することが重要である。

海のゆりかごとも呼ばれる「アマモ」を象徴として、全国的なアマモの再生・保全の現状や課題についての認識を全国の方々と共有し、意見交換することによって、全国で市民の手による海辺の自然再生・保全活動の活性化を目指している。

〈実施〉 (キーワード:全国各地での開催、活動内容の共有、イベント)

2008年から毎年、地域のNPO団体や自治体などから成る全国アマモサミット実行委員会により、全国各地でアマモサミットが開催されている。アマモサミットでは有識者や漁業者、NPO代表者などにより自然再生の現状や課題、成功体験、地域の活動などについて講演やディスカッションが行われる。また、地域の特産を用いた海の幸が堪能でき、海辺での釣り体験や海洋セミナーなどが体験できるイベントも開催されている。

これまでの開催地(開催年)は、次のとおりである。横浜市(2008)、米子市(2009)、指宿市(2010)、大阪市(2011)、小浜市(2012)、塩釜市(2013)、青森市(2014)。

全国アマモサミット 2012 in 若狭
11月10日(土) 10:00~17:30
『海の恵みをみんなの力で』
主催 国土交通省
協賛 福井県立小浜水産高等学校
会場 福井県立小浜水産高等学校
〒910-8501 福井県小浜市小浜1-1-1
TEL 077-358-1311

全国アマモサミット 2013 in みやぎ
11月9日(土) 10:00~18:00
「とりもどせ! みやぎのうみ」
主催 国土交通省
協賛 宮城県道庁
会場 宮城県道庁 遊歩ホール
〒980-0801 宮城県仙台市青葉区中央1-1-1
TEL 022-222-1111

全国アマモサミット 2014 in あおもり
9月27日(土) 13:00~17:30
「一むつ考の恵みに感謝! これからも」
主催 国土交通省
協賛 青森県文化観光交流推進課
会場 ねぶたの家 フラッセ
〒030-0801 青森市文化通り1-1-1
TEL 017-738-1311

〈効果〉 (キーワード:地域における活動開始のきっかけ、地域における活動の活性化、全国の地域間の連携)

- ・地域で海辺の自然再生活動が始まるきっかけや活性化につながっている。
- ・2年先まで開催地が決まっており、全国で地域間の連携を構築している。
- ・地域の方々が楽しみ海辺をより知るきっかけとなっている。

〈東京湾アマモ場再生会議ほか〉
NPO 法人 海辺づくり研究会
神奈川県横浜市

都市部において継続的かつ多様な活動が多様な主体により実施され、海辺の再生・保全を通して、地域復興や東京湾の再生に寄与している事例。

〈目標〉 (キーワード:沿岸域環境の保全・再生・創出、地域の復興、地球環境の保全)

海辺づくり研究会は、沿岸域環境の保全・再生・創出や自然と共生する海辺づくりに関する事業を、多様な主体とともに実施することによって、地域の復興や地球環境の保全に貢献することを目的に活動している。

〈実施〉 (キーワード:多様な組織の参画、多様な活動、継続的な活動)

東京湾を中心に特に以下の自然再生活動を実施している。また全国的な活動としては、全国アマモサミット(事例⑥)への参画、活動の発表等を実施している。

- ・アマモ場再生活動:緩やかな連携組織である金沢八景-東京湾アマモ場再生会議の枠組に参加して、2001年から継続して活動。同会議に参画しているのは、国の機関、神奈川県、横浜市、漁業協同組合、NPO法人や住民組織、地域の学校等の教育機関、研究機関等、多様である。東京湾横浜沿岸部のアマモ場再生活動を通じて東京湾の再生を目指し、主にアマモ場の再生や環境学習を柱に活動している。季節に応じて、次の活動を実施。(4月下旬:アマモ移植会、5月下旬~6月上旬:花枝採取会、8月上旬:種子選別会、11月上旬:アマモたねまき会、11月上旬:苗床づくりなど)。環境学習として小学生を対象としたワークショップを不定期に開催。
- ・夢ワカメ・ワークショップ:神奈川県沿岸域において、ワカメの種糸の取付けから収穫、有効活用を一般の参加者とともにに行っている。
- ・多摩川河口干潟生物調査(SCOP100)への参加:東邦大学有識者や一般財団法人みなと総合研究財団等と多摩川河口干潟で生物調査を実施。
- ・全国アマモサミットへの参画:毎年、全国で開催されるアマモサミットに参画し、海辺づくりに関する活動発表、情報提供等を実施。

〈効果と課題および対策〉 (キーワード:アマモ場の増加、地元企業の参加、情報発信の重要性、物質循環)

- ・アマモ場再生では、アマモ場の分布面積が増加している。また、東京湾の釣り船からアオリイカやクロダイが増加しているとの話を聞くこともあり、アマモ場再生の成果と考えている。
- ・活動経費の確保が課題であるが、地元企業の寄付金のほか、様々な公益法人や民間企業の助成も受けている。
- ・また、今後の課題として、地元の参加者の増加や将来の活動の担う若手の必要がある。
- ・参加者の増加のためには、情報発信が重要である。情報発信は、ホームページのほか、口コミ、学校へのチラシ(イベントの案内)、シンポジウムでの発表、マスコミへの広報などを行っている。
- ・夢ワカメ・ワークショップでは、東京湾の物質循環の促進への寄与、参加者のワカメ生育を通じた環境改善の実感、人と人とのつながりの構築が効果としてあげられる。

年間の主な活動のようす

4月下旬 アマモ移植会

アマモの苗(または栄養株)を、新しくアマモ場を再生する場所に植えます。



5月下旬~6月上旬 花枝採取会

みんなでアマモ場に入ってアマモの花枝(若いタネのついた枝)を集めます。



アマモ場再生会議の活動の様子



夢ワカメ・ワークショップ